スマートキッズ発達支援研究所便り「きらっと」44号　　2023年11月1日

発達支援研究所ホームページ https://smart-kids.co.jp/labo/

題名「大きく育つ八潮の木」

❤作品解説❤
絵具や画用紙を大胆に使って街や自然をテーマに仕上げました。
教室のみんなもそれぞれ違って、みんないいところがある、あふれる個性を大きな木で表現しました。
（スマートキッズプラス八潮第二）

親への支援と親の支援、そして学校の関わりの今昔を想う　　研究員　神田基史

国立大学附属の知的障害養護学校に31年間勤めた。初めの6年間は高等部に所属し、木工作業学習と進路指導が主な仕事であった。その後、小学部、養護・訓練部、幼稚部等を経験した。この学校は、スクールバスが1台しかなく、池袋と学校を結ぶ1コースしか運行せず、路線上の決められた場所から乗車できる幼稚部と小学部の幼児・児童だけしか利用できなかった。大半の幼児・児童は、保護者が登校・下校に付き添うことが入学の条件であった。教育熱心なご家庭が多く、ほとんどの母親が送り迎えをしておられた。子どもの祖父が共働きの親に代わって幼稚部・小学部9年間を送迎したご家庭もあった。

いつの日からか保護者に替わって送迎ボランティア（主に大学生）が現れ出し、かなりのご家庭が利用するようになり、時代の変化を感じたものであった。送迎（通学）支援の制度化や放課後支援の場の広がりとともに特別支援学校の登下校風景も大きく変わってきた。勤務校でも保護者の送迎はかなり少なくなり、送迎ボランティアと放課後支援の送迎車が学校に入る時代になっている。ある学校では玄関扉前の一列目はスクールバス、その外側の二列目は放課後支援の送迎車（マイクロバス、ボックスカー）、その外側三列目に母親が運転する自家用車が並ぶという具合である。この放課後支援（放課後等デイサービス、放課後学童クラブ、学童保育等）が飛躍的に増えてきている。保護者の負担軽減、児童・生徒の放課後活動の充実という観点から望ましい方向に進んでいると思う。放課後支援が選べる時代になったとある保護者が言っておられた。

ところが、先日、私が参画している障害児・者の自立を図る社団法人の理事会では、高等部卒業とともに支援の場あるいは卒業生の行き場・学び場が無くなるということが話題となった。理事の一人は、そういう事態を想定して在学中から子どもの行き場を学校外で探す努力をしたと話してくれた。YMCAの催しや行事、スペシャルオリンピック（サッカー、バスケットボール、ボーリング）等に積極的に参加するように親として努力したとのことであった。この社団法人は、そもそも私が勤めた養護学校の在校生と卒業生の親が会員となっており、運営は卒業生の

母親（特に元PTAの会長・副会長や役員経験者）が理事となって担当している。大きな仕事の一つは毎月1回学校で開催する「青年学級」の企画・運営・進行である。コロナ禍で開催を中止したり、Zoom開催にしたりせざるを得なかったが、この9月からは対面開催にこぎ着けている。卒業生が集まるのだから私も教員OBとして参加する。一番年齢の高い卒業生は、私と同じ古稀を迎えている。一番若い層は、この春の卒業生である。毎回30名前後が参加している。「青年学級」は、もともと学校主体で高等部教員を中心に教員全体で役割分担して実施していた。先輩教員の熱心な誘いがあり、私も新任教員として参加するようになった。毎週第3日曜日の実施で、午前中はホームルーム（悩み事相談含む）、全体活動（ダンス、ゲーム、歌唱等）、午後はクラブ活動（茶道部、華道部、野球部、音楽クラブ）等のクラブ活動を行う。更に遠足、一泊旅行、成人式などの行事も実施している。この「青年学級」を、今は卒業生の保護者が一般社団法人組織で運営しているのである。教員はかつての保護者がそうであったようにボランティアとして必要に応じて参加するという状態になっている。教員が多忙になり青年学級の活動に力を注げなくなったことが原因であるが、これは大きな変化である。本法人の「10周年記念小史」には、昭和42年（1967年）に青年学級と卒業生のアフターケアを目的にこの法人が発足したと記されている。運営主体の大きな変化はあったが、学校を場とした卒業生支援は必要性がまだまだ高い。教員に代わって青年学級を支える母親たちの思いの強さに頭が下がる思いであるが、教員の参加が減り、学校としての関わりが少なくなってきたことは憂うべきことである。実際、理事達は嘆いている。

神田　基史（かんだ もとし）　元帝京大学教育学部初等教育学科 教授

幼稚部から高等部まである知的障害養護学校で31年間教員生活を送りました。この間、保護者と教員との協働の大切さを痛切に感じるとともに、学校の教育・運営を地域の関係者やNPO、近隣の幼稚園や学校、そして各種ボランティアの皆さんに支えて頂いたことを心から感謝しております。
「社会に開かれた教育課程」が唱道される時代となり、地域との多様な形の連携・協働が一層求められています。ともに新しい一歩を踏み出しましょう。

略歴
昭和 54 年 鳥取大学教育学部養護学校教員養成課程 卒業
昭和 56 年 筑波大学大学院教育研究科障害児教育コース（知的障害専攻）修了
昭和 57 年 筑波大学附属大塚養護学校着任、平成 9 年 同校副校長